

## 「ハイデルベルク・ストラスブール派遣 参加報告書」

京都大学文学部 現代史学専修 2年 白坂彩乃

当プログラムにおいては「移動と文化越境」をテーマとして、とくに難民問題についてハイデルベルク大学・ストラスブール大学の学生と意見交換を行った。ここでは、主にストラスブール大学での学生とのワークショップを中心に報告する。

ストラスブール大学でのワークショップは、日本語学科の修士・博士課程の学生と行った。今回のワークショップでは、我々京都大学側は難民問題についてのプレゼンテーションを、ストラスブール大学側は各々の研究テーマについてのプレゼンテーションを行い、発表後は質疑応答・意見交換を行った。

まず京都大学からは3つのグループがそれぞれ、難民犯罪への対応策の提案、日本とフランスの難民受け入れ政策への提言、難民の就労問題への解決策を発表した。今まさに難民の流入に直面しているヨーロッパの一国、フランスの学生から直接意見を頂けたのは貴重な経験であった。難民を受け入れる際には、それが招くリスクを正確に判断して、それにあった策を考えることが重要であると改めて確認した。次にストラスブール大学から、3人の学生がフランスの進学制度、日本の男女の社会進出格差、近代日本のフェミニスト運動について発表した。ワークショップ前の交流会でも感じたことだが、日本語学科の学生はそれぞれ日本のことを研究テーマに据えていた。しかし具体的なテーマとしては江戸時代の上層経済から現代のジェンダーに関する問題まで多岐にわたっており、興味深かった。発表は自らの国と自分の研究対象とする国との比較がまず念頭に置かれていて、そのうえで共通点や相違点について言及しており、異国・異文化研究の方法論として参考になった。

ハイデルベルク大学でのワークショップは英語で行ったが、前述のワークショップは日本語で行った。そのため、ストラスブールの方がこちらとしてはスムーズに意見交換ができたが、このプログラムを通して、聞く・話すための英語を学ぶことの重要性を再認識させられた。そして、日本のメディアが報道する外国の出来事は一面的であることが多いが、それを鵜呑みにせず自らの目や耳で判断することが必要である。そのためにも、聞く・話すための英語力をつけて、積極的に外国人学生と交流すべきであると考えます。自分自身研究テーマには外国のことを据えるつもりであるので、今回のプログラムに参加して、さらに海外留学への意欲が増加した。このような貴重な機会を与えてくださった方々に感謝したい。